開田高原における地域住民の景観認識に関する研究

1X18D039-0 品川颯佑*

景観計画の策定においてはその地域の景観形成に影響を及ぼしてきた生活や生業，地域住民の景観認識の把握が特に重要となる．長年景観施策に取り組んできた長野県･開田高原では現在，景観指針の策定へ向けた取り組みを行っており，この取り組みの中で行われたアンケートの結果を用いて，属性から回答者を類型化することで景観評価やその要素に関する回答傾向が得られた．また，景観施策の認知度によって景観評価に差がみられることが示された．

Key Words：開田高原，景観認識，景観施策，アンケート調査

1. 序論

1.1 研究の背景

2003(平成 15)年に策定された美しい国づくり政策大綱や 2004(平成 16)年に制定された景観法，また，同年に文化財保護法へ文化的景観が設けられたように,景観に関する法整備が全国的に進められている．中でも景観法では，自治体による景観の取り組みに関して法の制度化が行われた．

自治体主導の取り組みでは，それぞれの地域に合わせた景観計画の策定が求められる．そのためには景観構成要素や住民の景観に対する認識についての把握が重要となる．農村の場合，自然と関わる地域住民の生活や生業によって独自の景観が形成されてきた．しかし，時代の変遷とともにライフスタイルは変化するため，既存の景観を維持するには，地域住民の景観に対する認識を把握し，景観保全のために行政から住民への働きかけを行うことも重要である[1)2)]．

長年にわたって特徴的な景観施策が行われてきた開田高原では，その積み重ねが現在の景観の形成に寄与している．取り組みの初期段階では行政主導で行われていたが，次第に住民による取り組みも増えていった．しかし昨今，木曽町への合併という行政の形態変化によって，開田高原地域で行われる行政主導の取り組みはやや停滞している[3)]．

このような現況下で，開田高原地域を含む木曽町は新たな景観指針を作成することを決定し，その第一段階として，景観施策に対する住民の認知や地域内の景観の魅力及び課題を把握するためのアンケートを実施した．また，景観に関する意見交換会の開催など，住民への働きかけも実施されている．

1.2 研究の目的

景観施策の成果と認知に着目して景観認識を捉えるにあたり，長年にわたる特徴的な景観施策の積み重ねがある開田高原を対象地として研究を行う．

本研究では，地域住民の景観認識について,先述の取り組みの中で行われたアンケートによって得られたデータを利用し，それを分析することで明らかにする．また，この結果から将来的な開田高原景観施策策定の方向性への知見を得ることを期待する．

なお本研究は，今年度木曽町において実施される「開田高原のこれからの景観づくり」の共同研究者の一員として参加して実施する．

1.3 既存研究の整理

本研究に関する既存研究として，①地域住民の景観認識に関する研究,②景観形成施策に関する研究,③開田高原に関する研究，以上 3 点から整理する．

(1) 地域住民の景観認識に関する研究

麻生ら[1)]はシンボル性を有する代表的な景観に対しては多様な認識があること，視点場及び視対象のわかりやすさによってその景観に対する保全意識には差があること，田園景観のように地域住民に認識されにくい景観はその保全意識が低くなることを明らかにした．

惠谷ら[2)]は「住民の農村景観における景観形成行動への心理的規定要因」として郷土愛などといった道徳的義務感が影響していることを明らかにした．ここでは，景観政策を進めていく過程で地域住民の意識向上につながる行政からの働きかけが行われてきたことを示している．しかし，政策に対する価値観など住民間で差があり，景観への取り組みに消極的な住民がいることも明らかにしている．

*早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 景観・デザイン 佐々木葉研究室 学部 4 年

文化的景観を保護する上で重要となる住民の意識を捉えたものとして，惠谷 [4]は景観保護のためには住民の意識を高める必要があることと，そのためのプロセスとして住民主導，行政主導による取り組みがあることを示している．

岩田 [5]は農村地域における住民の景観認識として地理的条件やそれに伴う制約のある土地利用によって形成された景観を住民は農村の特徴的な景観として捉えていることを明らかにした．

木下ら [6]は景観形成における住民の意識化に関して児童の風景描写から捉えた．生活の中での自然・人・物の動きから美的価値を捉えており，それが景観への意識化へと繋がることを明らかにした．また，思い出といった内面的要素による景観認識があることを示している．

(2)　景観形成施策に関する研究

村松 [7]は景観形成施策の形成過程として，間接的に景観へ影響を与える施策が，景観形成の概念が明確化することによって，景観そのものに直接的にアプローチする施策へ変化していくことを明らかにしている．その過程では，地域住民の合意形成やそれに伴う施策への認知が進むことも示している．

(3)　開田高原に関する研究

藤倉ら [8]は旧開田村の景観構成要素と地域内における社会的活動の関係性を導きだし，相関構造として示している．

また，旧開田村における景観政策の展開からそのプロセスを整理し，政策の実施によって地域社会に与えた影響についても示している [9]．

多田 [10]は開田高原における地形や可視領域といった空間的特徴，土地利用の変化から地域内の景観特性を示している．

以上の既存研究により，それぞれの対象地における景観認識の構造や施策が住民の景観認識に与えている影響が示された．このような傾向は，異なる対象地においてもその土地の景観認識を導き出す過程で参考となるだろう．

このように，地域住民の景観認識を扱う既存研究は多くあるが，既に景観施策の積み重ねがある地域を対象としているものは少ない．今回対象とする開田高原地域では全国的に見ても早期からの景観施策の積み重ねがあり，本研究ではこれらの取り組みに着目した上で地域住民の景観認識を捉える点に新規性がある．

2. 対象地の概要

2.1　対象地の地域概要

開田高原は長野県南西部の木曽町北西部に位置する．木曽町は 2005(平成 17)年に開田村・木曽福島町・日義村・三岳村が合併して発足し，このうち旧開田村が本研究の対象地である開田高原にあたる．面積は旧開田村当時の記録より 149.54km^2 である．2015(平成 27)年現在，人口は 1,636 人，世帯数は 671 世帯である [11]．

開田高原は四方を山に囲われる中，一部に開けた平地が存在する盆地地形を示す．標高は 1,100m ほどの高原地域となっており．西側には御嶽山を望むことができる．

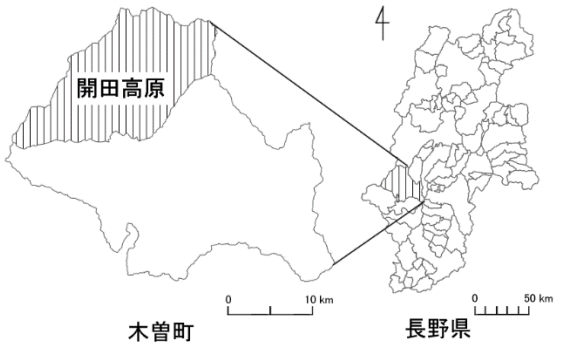

図-1　開田高原の位置 [10]

2.2　対象地の景観の概要

周囲を山々に囲まれた谷底平野の中央を河川が直線的に流れ，その両側には河岸段丘が形成された地形を有している．集落や農地，墓地などといった段丘の高低差を生かした土地利用も大きな特徴である．また，地域内の様々な地点から御嶽山が見られ，その雄大な眺望は人々の生活の中で信仰の対象となっている．その他，切妻大屋根の民家なども特徴的である．

このような景観を図化したものとして，1979(昭和 54)年の観光資源保護財団による報告書では，**図-2** のような開田高原の景観構成モデルを示している [12]．また，この報告書では景観構成だけでなく，自然的・社会的条件や開田高原の民家形態などについても言及されている．

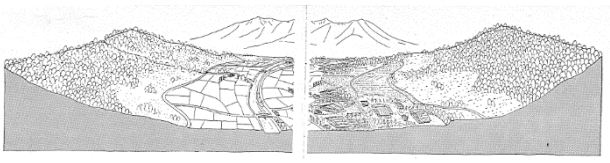

図-2　開田高原の景観構成モデル [12]

2.3 対象地の景観施策概要

開田高原では全国的な自主条例制定の黎明期から景観施策を行ってきた．このような施策は地域住民と行政との協働によって行われたものもあり，それぞれ地域住民の景観認識に強い影響を与えていると考えられる．以下，施策の概要について藤倉ら[9]の研究を参考に述べる．

(1) 開田高原開発基本条例

1972(昭和 47)年より自然環境・景観の保全を目的として開始された．御嶽山眺望の優れた場所で別荘地の乱開発の危機があったことが背景にあり，開発造成に基準を設け，建築高さや屋外広告物の規制を行った．自治体全体を対象に罰則規定を含む景観条例として当時では先進的な条例であった．

(2) サインシステム整備事業

1979(昭和 54)年より景観阻害要因の除去を目的として開始された．この事業は行政のほか観光協会と一体的に取り組み,乱立していた野立看板を除去し，木造の統一仕様のサインへ統合した．

(3) 銘木百選事業

1988(昭和 63)年より地域景観の保全・魅力の向上を目的として開始された．来訪者からの手紙によって，住民の認識には無かった草木や樹木も来訪者は美しい景観として捉えていることが明らかになったことを背景として，住民の間にもその保全意識が高まった．

(4) 沿道景観整備事業

1989(平成元)年より国道沿線の白樺林の保全・魅力の向上を目的として開始された．この背景には新たな玄関口となるトンネルが整備されたことが挙げられる．沿道を借地し，白樺林の保全・手入れをすることで乱開発から守り，来訪者にとって魅力的なものとして整備を行った．

(5) 集落内景観整備事業

1989(平成元)年より地域景観の保全・魅力の向上を目的として住民主体の取り組みに対する支援が開始された．ゴミ置き場の整備を住民が自主的に行ったことなどが挙げられ，後のゴミステーション事業へもつながった．

(6) ペンキ代助成事業

1990(平成 2)年より地域景観の保全･魅力の向上を目的として開始された．建築物の外壁や屋根の色彩は景観に影響を及ぼすとして，周囲の自然景観に溶け込むような茶系色の塗装にするための補助金制度を整備した．

(7) 外部機関への協力要請

1994(平成 6)年より地域景観の保全･魅力の向上を目的として開始された．信号機の柱の色を茶系色にするなど，周囲の自然景観に配慮したインフラ施設の整備を開田高原外に対しても要請した．

(8) ゴミステーション事業

2003(平成 15)年より地域景観の保全・魅力の向上を目的として開始された．当初は一部の地区住民の自主的な活動だったが，地域の全体的な事業へと発展していった例である．ここではゴミステーションを統一様式の木造小屋にすることで周囲の景観へ配慮している．

3. アンケートにおける回答者属性とその傾向

3.1 アンケート調査概要

2021(令和 3)年 7 月に景観認識に関する基礎情報を得るためのアンケート調査が企画・実施された．アンケート用紙と共に活動の趣旨や既往の取り組みなどを解説したニューズレターを配布しており，これら一連の媒体の編集・作成について著者を含む研究室にて行った．**表-1** にアンケートの概要について示す．

表-1 アンケートの概要

調査対象者		開田高原地域住民
調査期間		2021年7-9月
配布数		620部
回収数・回収率		163部(26%)
配布・回収・回答方法		区長会経由・郵送による配布・回収、GoogleFormによる回答
質問項目	個人属性	年齢、性別、職業、勤務・通学先、出身地、引越理由、居住年数、居住
	取り組みについて	取り組み全体に関する認知、取り組まれてきた政策それぞれに関する認
	魅力	景観の魅力度、具体的な魅力要素
	課題	具体的な課題要素

3.2 アンケート結果

アンケートは 163 部回答され，その内，区長会経由・郵送によって配布・回収されたものが 153 部，GoogleForm にて回答されたものが 10 部であった．**表-2** に回答者の属性を示す．

3.3 単純集計結果

図-3 に開田高原がこれまで景観づくりに取り組んできたことの認知度の回答結果，**図-4** に各施策に対する認知度の回答結果，**図-5** に開田高原の景観が魅力的かについての回答結果を示す．

3.4 回答者の類型と回答傾向

回答者の属性による回答傾向を把握するためにま

表-2　アンケート回答者の属性

年齢	20代1名，30代1名，40代16名，50代22名，60代49名，70代52名，80代20名，無回答2名
性別	男性78名，女性51名，答えない8名，無回答26名
職業など	農業21名，建設業5名，宿泊業3名，飲食業7名 その他サービス業10名，会社員・公務員37名， パート・アルバイト21名，家事従事者6名， 無職42名，その他13名，無回答1名
勤務先・通学先	開田高原地域66名，開田高原以外の木曽町23名， 郡内他町村9名，群外4名， 通勤通学していない30名，無回答31名
出身地	開田高原地域104名，郡内他町村15名， 群外39名，無回答5名
引っ越してきた場合の理由	結婚13名，転職・転勤2名，Uターン23名， 移住36名，その他9名，無回答80名
開田高原での居住年数	5年未満12名，5年以上10年未満11名， 10年以上20年未満20名，20年以上111名， 無回答9名
居住地	小西7名，下向9名，藤沢3名，下栗尾8名， 越11名，西又1名，把ノ沢16名，下条21名， 小野原3名，大屋1名，向筋6名，大明29名， 馬橋10名，髭沢19名，中沢5名，無回答13名

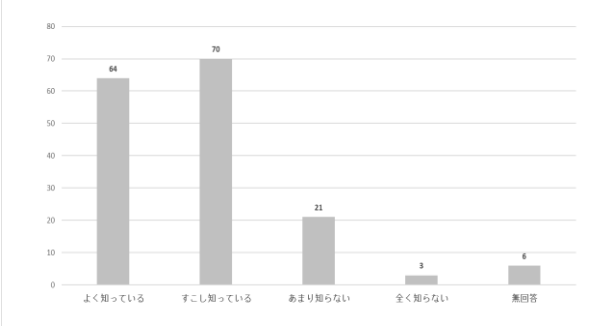

図-3　景観づくりの取り組みに対する認知度

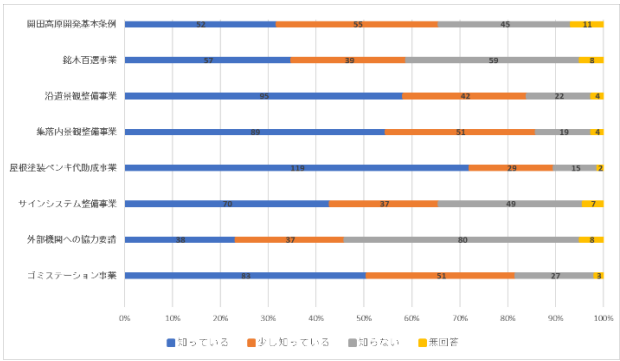

図-4　各施策に対する認知度

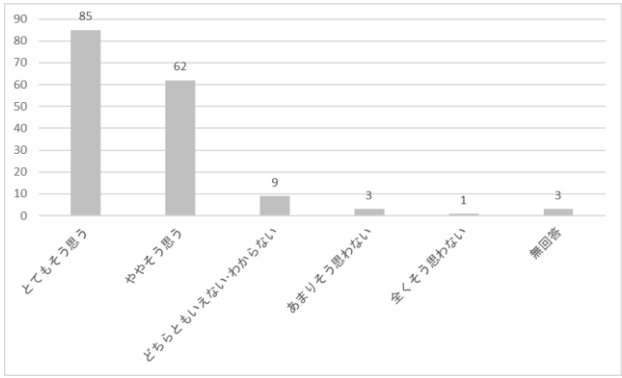

図-5　景観が魅力的かについて

表-3　各クラスターの特性

	抽出要素	主体
クラスター1 (n=32)	郡外出身、移住者、 開田高原地域勤務、 居住年数10年以上20年未満	開田高原地域に勤務する郡外出身移住者
クラスター2 (n=30)	通勤通学していない、無職、 郡外出身、移住者、女性、70代	勤務していない郡外出身移住者
クラスター3 (n=21)	勤務先無回答、無職、 80代以上、居住年数無回答、 居住地無回答、 引っ越してきた場合の理由無回答	勤務していない開田高原出身者
クラスター4 (n=29)	農業、 引っ越してきた場合の理由無回答、 70代居住年数20年以上、 開田高原地域出身、 開田高原地域勤務、居住地髭沢	農業に従事する開田高原出身者
クラスター5 (n=52)	開田高原地域出身、 会社員・公務員、 居住年数20年以上、男性、 開田高原地域勤務	開田高原地域に勤務する開田高原出身者

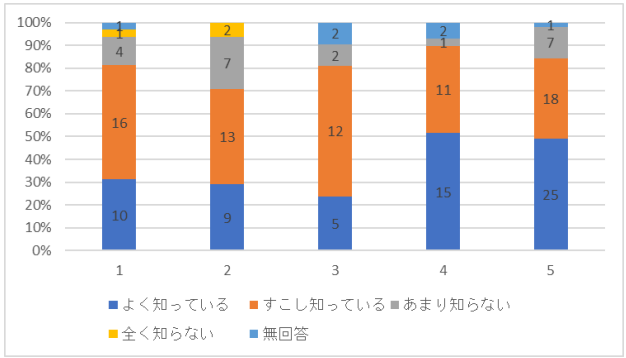

図-6　属性によるクラスター別の取り組み認知度

ずクラスター分析によって回答者をグルーピングした．**表-3** に各クラスターの特性を示す．

図-6 にクラスター別での景観づくりの取り組みに対する認知度の集計結果を示す．クラスター2，3の結果から勤務していない方の認知度が比較的低い傾向にあると考えられる．これに対し，クラスター4 では最も高い認知度が見られ，地域の景観構成に関わり深い農業従事者の認知度が高いと考えられる．

図-7 にクラスター別での景観が美しい・素晴らしいと思うかに関する集計結果を示す．クラスター2，4 の回答傾向から，勤務していない郡外出身の方や長年開田高原で生活し農業を営んでいる方の「とてもそう思う」と感じている方の割合が特に多いと考えられる．

表-4 に景観・風景の美しさ・魅力として具体的に当てはまるものに関する集計結果を割合で表したも

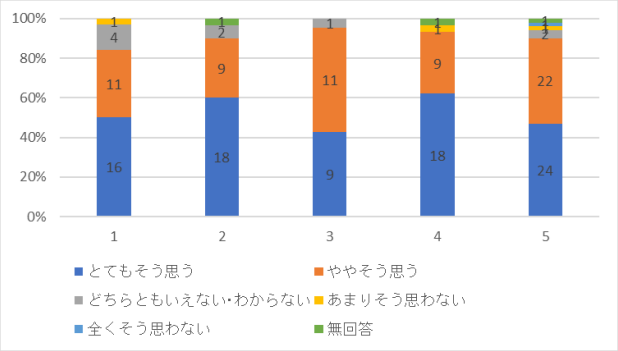

図-7　属性によるクラスター別の魅力度

のを示す.「多様な生き物や植物のいる景色」に対する選択傾向から，開田高原地域出身の人に比べ移住者の方がこの要素を重視する傾向にあると考えられる．移住者に比べ開田高原出身の方が重視する要素として「信仰の対象としての御嶽山」の項目が挙げられる．長年にわたって住み続ける中で信仰といった要素が重視されるようになったと考えられる．

表-5 に景観の課題として具体的に当てはまるものに関する集計結果を割合で表したものを示す.「川岸や川の流れの変化」の項目がクラスター3，4 では他と比較して多く挙げられており，長年にわたって住む中で変化が強く表れたものとして挙げられたと考えられる．

4. 施策の認知による景観認識

4.1　施策の認知と魅力的な景観に対する認識

表-6 に景観・風景の美しさ・魅力として具体的にあてはまるものに関して施策の認知度別に「よく知っている」，「すこし知っている」，「あまり・全く知らない」の 3 段階にまとめて集計し，割合で表したものを示す.「多様な生き物や植物のいる景色」,「お祭りや野焼きなどみんなで参加する行事」の選択割合から認知度が高い人ほど地域内の景観構成要素に着目しやすいと考えられる．

4.2　施策の認知と課題とする景観に対する認識

表-7 に景観の課題として具体的にあてはまるものに関して施策の認知度別に集計し，割合で表したものを示す.

5. 結論

5.1　開田高原住民の景観認識

開田高原の景観の魅力として，全体的に「御嶽山や遠くの山々の眺望」が特に多く挙げられ，御嶽山が景観構成要素として特に重視されていることが明らかになった．ほかの魅力要素や課題については属

表-4　属性によるクラスター別の魅力として当てはまるもの

	御嶽山や遠くの山々への眺望	渓谷や高原の雄大な眺め	御嶽山を背景にした家並みなど	多様な生き物や植物のいる景色	季節や時刻で変化する様子	豊かで澄んだ水の流れ	満天の星空や月の眺め	冬の厳しい寒さのなかの景色	手入れの行き届いた農地や草地	大屋根が並ぶ集落の眺め	山菜やきのこ、川魚など山や川の恵み	石仏や祠などの道端に感じる歴史	お祭りや野焼きなどみんなで参加する行事	自分の家や庭で目にする身近な眺め	よく手入れされた家々やその庭	木曽馬が草を食んでいる眺め	信仰の対象としての御嶽山	歴史を感じる建物やまちなみ	高原に似合うセンスの良いお店や宿泊施設	元気な子どもたちがいる景色
1	69	31	16	25	47	19	78	47	9	3	28	9	34	9	0	44	16	6	0	9
2	90	33	3	30	50	23	63	67	10	0	17	20	17	23	7	37	13	3	3	0
3	95	19	14	5	14	48	57	29	0	5	29	10	24	14	0	43	33	0	5	10
4	90	31	17	10	34	24	41	28	10	0	69	10	31	0	0	48	24	0	0	3
5	75	22	27	10	31	27	78	53	14	4	27	2	25	10	2	43	18	0	0	4

表-5　属性によるクラスター別の課題として当てはまるもの

	荒れた感じの森や林	川岸や川の流れの変化	外来種の増加や希少種の減少	手入れがされない農地や草地	雑木や草が伸び放題の道	空き家や放置された倉庫	目障りになる電柱や電線類	白く目立つガードレールや柵、傾いているカーブミラー	周囲に溶け込まない色や形の建物	老朽化したり役目を終えた看板類	廃棄物などの放置	ペットボトルや空き缶などゴミの散乱	必要以上に明るい照明
1	41	6	19	28	41	41	31	22	6	9	13	13	13
2	33	3	53	30	20	23	17	10	7	3	7	23	7
3	43	14	38	38	52	33	14	5	0	0	14	10	0
4	72	21	38	45	45	28	10	7	3	0	7	10	0
5	59	6	37	59	47	41	8	8	2	16	12	10	2

表-6　施策の認知の程度別の魅力として当てはまるもの

	御嶽山や遠くの山々への眺望	渓谷や高原の雄大な眺め	御嶽山を背景にした家並みなど	多様な生き物や植物のいる景色	季節や時刻で変化する様子	豊かで澄んだ水の流れ	満天の星空や月の眺め	冬の厳しい寒さのなかの景色	手入れの行き届いた農地や草地	大屋根が並ぶ集落の眺め	山菜やきのこ、川魚など山や川の恵み	石仏や祠などの道端に感じる歴史	お祭りや野焼きなどみんなで参加する行事	自分の家や庭で目にする身近な眺め	よく手入れされた家々やその庭	木曽馬が草を食んでいる眺め	信仰の対象としての御嶽山	歴史を感じる建物やまちなみ	高原に似合うセンスの良いお店や宿泊施設	元気な子どもたちがいる景色
よく知っている	81	25	17	19	34	25	66	48	11	3	31	3	34	9	2	41	19	0	0	2
すこし知っている	86	29	20	16	39	24	73	44	9	1	34	13	21	11	1	40	20	1	1	7
あまり・全く知らない	72	28	16	8	44	40	60	48	8	4	28	12	16	16	4	52	20	8	4	8

表-7　施策の認知の程度別の魅力として当てはまるもの

	荒れた感じの森や林	川岸や川の流れの変化	外来種の増加や希少種の減少	手入れがされない農地や草地	雑木や草が伸び放題の道	空き家や放置された倉庫	目障りになる電柱や電線類	白く目立つガードレールや柵、傾いているカーブミラー	周囲に溶け込まない色や形の建物	老朽化したり役目を終えた看板類	廃棄物などの放置	ペットボトルや空き缶などゴミの散乱	必要以上に明るい照明
よく知っている	52	9	41	47	42	33	16	6	5	9	13	11	5
すこし知っている	50	10	37	40	46	30	17	13	4	7	9	14	6
あまり・全く知らない	52	4	28	48	28	52	12	16	0	4	8	16	0

性や施策の認知によって傾向が異なり，その差は居住年数といった地域へ関わってきた期間の長さに左右されやすいと考えられる．

5.2　今後の展望

今回のアンケートによって地域住民がどのような景観に着目しているか，また，属性や景観施策の認知によってその認識にはある程度の差があることが示された．高齢化が進んでいく中で開田高原に住み続けてきた人だけでなく移住者からの視点も大切になる．今後，このような様々な景観認識傾向を踏まえた景観施策の展開が考えられる．

＜参考文献＞

1) 麻生恵, 堀江篤郎：岡山県蒜山地域における景観計画と地域住民の景観認識構造について，造園雑誌, Vol.56, No.5，pp.205-210，1992
2) 惠谷浩子, 村松真, 麻生恵：農村地域における景観形成に関わる住民の認識と行動の構造化，日本造園学会 全国大会 研究発表論文集 抄録, pp.575-578，2007
3) 山田圭二郎, 藤倉英世, 羽貝正美, 西研, エヴラン・勝木慶子：「地域の物語」の再生と自治の諸相, Projets de Paysage, Vol.23, 2020
4) 惠谷浩子：住民意識の反映としての文化的景観，ランドスケープ研究, Vol.73, No.1，pp.18-21，2009
5) 岩田俊二：農村景観についての多様な認識-三重県伊賀市調査から-，農村計画学会誌, Vol.31, No.3，pp.476-480，2012
6) 木下勇, 中村攻：児童の風景描写からみた農村景観への意識化に関する基礎的研究，造園雑誌, Vol.56, No.5，pp.211-216，1992
7) 村松真：農山村における景観形成施策の特色-山形県金山町の景観づくり事例として-, 農業経済研究報告, No.33，pp.67-82，2001
8) 藤倉英世, 山田圭二郎, 羽貝正美：地域景観と地域社会の相関構造及び景観の内的システムの生成・発現に関する実証的研究，土木学会論文集 D，Vol.66，No.3，pp.394-413，2010
9) 藤倉英世, 山田圭二郎, 羽貝正美：基礎自治体の景観を巡る政策循環プロセスと自治の基盤の再構築に関する実証的研究 -長野県旧開田村の景観を巡る施策群を対象として-, 土木学会論文 D3(土木計画学)，Vol.68，No.3，pp.160-179，2012
10) 多田千晃：GIS を使用した空間分析による景観特性の把握-長野県木曽町開田高原を対象として-，早稲田大学卒業論文, 2021
11) 木曽町町勢要覧資料編, 2018
12) 財団法人観光資源保護財団：観光資源調査報告 vol.7 木曽町開田高原, 1979